

奈良県立医科大学 学報

July
2007

vol.21



平成18年度医学科卒業式 学長賞授与

CONTENTS

学長賞の授与	1
同志社女子大学との連携調印式/看護短期大学部同窓会図書寄贈	2
ホオジロ通信	3
就任あいさつ	4
医学教育シリーズ12	5
研究紹介(生命システム医科学)	6
研究紹介(小児看護学)	7
看護部から/NICUの試み	8
住居医学研究奨励金交付決定/住居医学研究会開催/ ひらめき☆ときめきサイエンス	9
オープンキャンパスの実施/整形外科教室から	10
地域医療連携室の紹介	11
科学研究費補助金の決定	12~13
チェンマイ大学看護学部との学術交流 レポート	14 15
国家試験合格状況/中島佐一学術奨励賞/下ッ道	16

学長賞が授与されました

(学務課)

本学学長賞は、学務委員会で選考され、各年度において本学を卒業する医学科・看護学科それぞれの成績最優秀者各1名を表彰するもので、表彰状及び副賞は卒業式当日に学長から学生に授与されます。第1回目の授与となる平成18年度は平成19年3月20日の卒業式において医学科は橋本直樹さんに授与されました。

なお、看護学科については、卒業生が出る平成19年度からとなります。



奈良県立医科大学学長賞の受賞にあたって

橋本 直樹

この度は学長賞という栄誉ある賞を頂き、大変光栄です。これも私を支え導いてくださった先生方や家族、友人達のお蔭です。この場をお借りしてお礼申し上げます。今回の授賞を励みにして卒業後も頑張っていきたいと思っております。

学長賞はその学年での成績最優秀者に贈られるものですが、私自身は決して勉強が得意ではありませんでした。それでもこのような賞を受賞できたのは、自分は物覚えが悪く人一倍勉強しないとついていけないという自覚があったからだと思っております。そのため机に向かっている時間は長かったかもしれませんが、しかし卒業した現在思い返してみると、まだ頭に残っている知識は独りで教科書を読んで得たものではなく、友人達と共に時に雑談も混じえながら勉強してきたことがほとんどだと思っております。勉学も含め大学時代に友人達と共有した時間は私のこれからの人生の大きな財産になると強く感じます。これから医者として数多くの困難に直面することになると思いますが、6年間で得た知識と経験を生かして頑張っていきたいと思っております。

奈良県立医科大学と同志社女子大学が 学術交流に関し包括協定を締結しました

(6月26日に協定書調印式を行いました)

(研究推進室)



【調印式】 本学 吉田修学長(左)と同志社女子大学 Nicholas John Teele 学長(右)との間で、協定書の交換が行われました。

このたび、奈良県立医科大学と同志社女子大学は、教育・研究活動全般における交流・連携を推進し、相互の教育・研究の一層の進展と地域社会の発展に寄与することを目的として、学術交流に関する包括協定を締結しました。

今後、両大学が持つ知的・人的資源を相互に提供し合い、学生・教員の交流も促進することで、教育、研究あるいは診療活動等における新たな可能性を拓げ、両大学の一層の活性化を図ることができるような種々の取組を行って参ります。

加えて、優れた人材の育成、独創性に富んだ共同研究の実施、患者中心の医療の充実等を推進し、本学術交流の成果を広く社会に還元できるよう努めて参ります。

奈良県立医科大学看護短期大学部同窓会より図書が寄贈されました

(附属図書館)

過日、奈良県立医科大学看護短期大学部同窓会より、看護短期大学部の「閉校記念」として、看護学科に50万円分の図書を寄贈したいという申し入れがありました。そこで、看護関連の教育の充実に利用できそうな図書およびビデオ(DVD)を選定させていただきました。寄贈のシールを添付し、図書館に配置しますので、多くの学生や教員が活用し、自己研鑽に努められますことを期待しています。

教育基本法の改正と医学教育

学長 吉田 修

我が国の教育基本法をめぐる歴史は1890年（明治23年）に交付された教育勅語に遡る。筆者の年代では、「朕惟フニ我力皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」で始まる教育勅語を、全文ではないにしても、部分的には憶えている人も少なくない。この教育勅語は戦後、封建的、非民主的なものとして全面的に否定されたが、はじめから終わりまで全てが間違っているのではない。例えば「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習イ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ」という行は、現代でも多くの人が、斯くあるべし、ないしは斯くありたいと思っていることであろう。

終戦になり、1947年（昭和22年）に教育基本法が制定された。この教育基本法も格調の高い、美しい文章で綴られた素晴らしいものであると思う。しかし、これはアメリカ（当時のGHQ）の「押しつけである」との理由で、改正すべしとの議論がなされてきた。けれども、この基本法をまとめた「教育刷新委員会」の委員長であった南原繁先生は、そのようなGHQからの指令や強制は一度もなかったこと、そして「今後、いかなる反動の嵐の時代が訪れようとも、何人も教育基本法の精神を根本的に書き換えることはできないであろう。なぜならば、それは真理であり、これを否定するのは歴史の流れをせき止めようとするに等しい」からであると述べている。

では今回の改正は必要ないと考えるのか、または反対かと問われると、「そうではない」と答えた。なぜならば教育基本法の精神を根本的に書き換えることなく、旧基本法には謳われていない改正基本法には明確に述べられているいくつかの点があるからである。私はここで「郷土や國を愛する心」について議論しようとは思わない。しかし、我々大学人が改正教育基本法で注目しておかねばならないことは、第7条で大学について新たに規定している点である。まず、大学は、「高い教養と専門的能力を培う」場であるとしている。専門的な教育だけではない点は注目に値する。ついで「深く真理を探究して、新たな知見を創造し」とある。つまり、研究の重要性を述べている。そしてこれらの成果を「広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」となっている。この最後のところは、市場原理をそのまま取り入れた実学重視の現代の風潮を表している印象を拭えない。

翻って、公立大学法人奈良県立医科大学は医学科と看護学科を有する医科大学である。医師となり看護師となるための専門的知識と能力を培うことは当然であるが、同時に高い教養を身に付ける教育が必要なことを忘れてはならない。これは「一般教育」の役割は極めて重要であるが、それだけでなく六年間の一貫教育を通じて行われなければならないことである。学生諸君が専門的知識と能力の修得に全力で取り組むべきことは申すまでもないが、人間としての成長に不可欠の「高い教養」を身に付けるための弛まぬ努力と意欲をもつことを心から望みたい。

さらに、「自主性、自律性その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない」とあるが、この四月から公立大学法人として新たな出発をした我々の大学では、この点の実践に向けて全員協力の下に邁進すべきであろう。「自主性、自律性」を確保するためには「自立性」が不可欠であることも忘れてはならない。



ホオジロ

【ホオジロ通信のいわれ】

ホオジロの鳴き声は「イッピツケイジョウツカマツリソウロウ（一筆啓上仕り候）」と聞こえるといわれます。本学教職員および関係者の皆様に一筆啓上仕るという意味で、この欄をホオジロ通信と名付けました。



就任あいさつ

— 副院長の選任について —

附属病院長 榊 壽右

本年4月から本学が独立行政法人化されて、附属病院の体制も、より良い医療の提供とともに、効率的な経営を考えてゆかねばならなくなりました。従いまして従前の2人の副院長（臨床系の教授）に加えて看護部から小林看護部長、中央放射線部から上野山技師長が副院長に加わっていただき4人体制といたしました。病院の経営改善には、各医療部門の一致団結が極めて重要と考えたからです。今までは、それぞれの部門が個々に要求しあって統一性が乏しく、不合理と思われることも多々ありました。このことによって、病院の実行方針が効率よく各部門に生かされると思いますが、同時に今まで持ち得なかったそれぞれの部門の問題点を共有し合うこともできると思います。そして、一部の人達だけが病院を経営しているのだという考えを捨て、みんなが経営に参画し責任もあるのだという考えに変わっていただきたいと思っています。

副院長就任挨拶



看護部長 小林 雅子

このたび、副院長を務めさせていただくことになりました。看護部長が副院長になることは、永い奈良県立医科大学附属病院の歴史の中で初めてのことであり、その重責に身のひきしまる思いです。今、私の最大の課題は看護職員の確保です。皆様方のご協力を得て看護師が働きやすい環境の整備、研修制度の充実、募集対策等に取り組んでいきたいと考えています。さらに、特定機能病院として10:1の看護職員配置には、当面、皆様方のご協力をお願いしなければなりません。

独立行政法人化をチャンスとしてとらえ、経営の健全化に協力し、県民に信頼と愛される病院になるよう、微力ながら病院長を補佐していきたいと思っています。ご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。



中央放射線部技師長 上野山 文男

本年4月1日から奈良県立病院より中央放射線部技師長として赴任致しました。引き継ぎ書類の整理、見直しに時間を費やしていましたが、このたび副院長の大役を仰せつかりました。法人化に伴いコメディカル（今回は看護師、診療放射線技師）から病院経営に参画するという方針が出されたことは、これからの運営に多くの専門職種が関わることの重大さが認められたということです。そして今回は第1回の任命ということで特に責任重大と認識しています。多種多様な問題の根底にあるものは専門職種間の隙間ではないでしょうか。ひとつひとつ取り上げて埋めていくそのような仕事が出来ればと考えます。副院長と中央放射線部技師長という2つの立場で模索中ですが、皆様に支えて頂きながらこれまでの経験を基に自分の良い所を表に出して行ければと思っています。隙間を埋める体制作りが出来ますようにご協力をお願い申し上げます。

教授就任挨拶



皮膚科学講座 教授 浅田 秀夫（あさだ ひでお）

本年5月16日付けで、本学皮膚科学教室を担当させて頂くことになりました。私は昭和59年に本学を卒業後、ウイルスの研究を志して大阪大学に行き、微生物病研究所で学位を取得しました。その後、大阪大学皮膚科学教室で「ウイルス感染症と免疫・アレルギー」を主なテーマとして、診療・研究に従事してまいりました。5年前に宮川幸子教授（現名誉教授）のもと、母校に助教として赴任し、このたび教授に就任いたしました。皮膚科では、アトピー性皮膚炎、膠原病、水疱症、薬疹など、免疫・アレルギー疾患が多く、その病態形成に感染症が関わっていることが、近年明らかになりつつあります。これらの疾患の病態解明と新しい治療法の確立を目指して診療・研究活動を続けると共に、後進の育成に誠心誠意努力してゆく所存です。今後とも皆様方のご指導とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



健康政策医学講座 教授 今村 知明（いまむら ともあき）

6月1日付けで、健康政策医学講座教授を拝命いたしました今村です。

私は、関西医科大学卒業後、東京大学大学院医学系研究科で博士号を取得しました。その後、厚生省へ入省し、統計情報部、文部省学校健康教育課、厚生省エイズ課、佐世保市保健福祉部、厚生労働省食品保健部を経て東京大学医学部附属病院企画経営部長、助教授を経ての就任です。

私は今まで一貫して厚生行政や医療経営などの現場の最前線におりました。社会医学が「社会」の生態系を把握しようとする基礎医学であるとするれば、厚生行政や医療経営は病んだ「社会」や「病院」への治療を試みる臨床医学です。

この社会医学での臨床の経験を健康政策医学、ひいては奈良県立医科大学の発展のために役立てたいと考えております。皆様方のご指導とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

屋根瓦方式の教育システム

教育開発センター 教授 森田 孝夫

屋根瓦方式の教育システムとは、“Teaching is learning twice”（「教えることは学ぶことの半ば」）の考え方をもとにして米国で行われている教育システムです。教育病院で指導医が上級レジデントを、上級レジデントが下級レジデントを指導し、さらにクリニカル・クラークシップでレジデントが3、4年次学生を指導するという教育システムを「屋根に敷かれた瓦」にたとえたものです。最近はさらに進んで、4年次医学生を1年次（ときに2年次）医学生教育の中のいろいろな場面で、「教師」としての役割を持たせることがいくつかの大学で行われており、「屋根瓦方式の学生版」として注目されています。上級生の役割は、プリセプター（学生指導医師と訳されることがある）、医療面接と身体診察での標準模擬患者、問題基盤型学習（PBLチュートリアル）でのリーダー、そして、近頃わが国大学院でも採用されているティーチングアシスタント（TA）などで、下級生の学習を支援すること目指しています。これは将来の教員や指導医になるための準備教育ともなり、「良き医師は患者にとっても良き教師」への前段階としての訓練ともいえます。この4年次学生教師は下級生に好評だということで、その秘訣は自らが学習者であった立場に還って、下級生に「教師」として接し、行動するからだといわれています。つまり自身の体験から「何が解りにくいかを知っている」ということです。このように上級生が下級生を教えることは、双方にメリットをもたらすことが分かります。

以上、米国のシステムについて紹介しましたが、わが国では「学生が学生を教える」ということはまだ一般的ではありません。米国では「on the job training」による医療人教育システムが確立しており、その教育理念は“See one, do one, teach one”と表現されています。ここでは“Teaching”を学習法のひとつとして明確に位置づけています。「屋根瓦方式」はこの「on the job training」と切り離して考えることはできませんので、わが国ではまだ馴染みにくい部分もあります。しかし、臨床研修の必修化とクリニカル・クラークシップの推進によって教員（指導医）の負担は増加し、マンパワーの不足が深刻となった現在、「屋根瓦方式」を導入することは自然な流れだと思えます。

本学でも学生相互の学習支援を目的として「プリセプターシステム」を昨年（平成18年度）から立ち上げました。従来の担任制度をさらに発展させたものとして位置づけられており、まだ正式なカリキュラムにはなっていません。しかし、医療面接、身体診察入門、バイタルサインの測定などの基本的な臨床技能（スキル）などを6、5年次学生が1、2年次学生に教える機会をつくることは現在でも可能だと思います。さらに発展させて、米国のような「屋根瓦システム」としていくためには正式なカリキュラムのなかに組み入れていくことが必要だと思います。もし、6年次学生が2年次学生に自らの経験から基礎医学が臨床医学といかに関連するかのオリエンテーションを行うような授業が実現したとすると、2年次学生にとっては基礎医学を学ぶための大きな動機付けになるでしょう。また、6年次学生は4年前に習った基礎医学を「更新update」する良い機会になると思います。さらに、下級生にとって上級生は「先進的仲間」であり、一番身近な「ロールモデル（role model、お手本）」です。「明日は私も教師」、「来年はもっと良い教師」と自覚することは、医療人として卒前、卒後から生涯にわたって学習を続けていく上で大きな効果をもたらすに違いありません。

「学生版屋根瓦方式」を実現するには、現段階では課題も多いのですがなんとか実現できたらと考えています。教職員諸氏・学生諸氏のご理解とご協力をお願いいたします。

滑脳症原因遺伝子Arxによる神経細胞移動の制御

教授 坪井 昭夫
 助教 吉原 誠一

私達の研究室は、先端医療を支えるのは基礎医学研究であるというニーズに基づき昨年の5月に新設されました。感覚受容システム（特に嗅覚神経系）をモデルにして「脳において神経回路がどのようにして形成されるのか、また神経回路が何らかの原因で破壊された時、どのようにして再構築されるのか」を明らかにし、神経疾患の予防・治療、再生医療などの臨床医学への応用を目指しています。本稿では、現在行っている研究の中からArx遺伝子に関する研究について紹介します。

Arx遺伝子はX染色体上に存在するホメオボックス型転写制御因子であり、ヒトの滑脳症（脳回がなく脳表面が平滑になる大脳皮質形成障害）の原因遺伝子として知られています。さらに、Arx遺伝子の変異が滑脳症の他にもてんかんや精神発達遅滞を引き起こすことも報告されています。Arx遺伝子欠損マウスを解析すると大脳皮質・線条体・嗅球といった脳の様々な部位で神経細胞の移動に異常が起こり、正しい場所に神経細胞が配置されていませんでした。この神経細胞移動の異常が滑脳症・てんかん・精神発達遅滞といった様々な症状の原因ではないかと考えられています。

私達の研究室ではArx遺伝子による神経細胞移動の制御に関して特に嗅球の介在神経細胞に焦点を絞って解析を進めています。嗅球は匂い分子を受容する嗅細胞の接続先であり、嗅覚情報の処理を行っている脳の領域です。嗅球の介在神経細胞は胎生期だけでなく成体期においても常に産生され続け、嗅球内の適切な場所へ移動することで新たな神経回路を形成し続けています（図1）。ほとんどの神経細胞は成体期に新たに産生されることが無いため、嗅球の介在神経細胞は再生医療の観点からも注目されています。

解析の結果Arx遺伝子欠損マウスにおいては嗅球の介在神経細胞は嗅球へと到達できず、その手前で停留するという移動の異常が起きていました（図2）。その結果、Arx遺伝子欠損マウスの嗅球は野生型に比べて縮小していました。Arx遺伝子は転写制御因子であるため、神経細胞の移動に関与する遺伝子の発現をArxが制御していると推測されます。現在この変異マウスを用いて神経細胞の移動を制御する分子の同定を試みています。この研究によって神経細胞移動の分子メカニズムの解明並びにそれらの知見をもとにした再生医療への応用を目指しています。

当研究室では上述した研究テーマ以外にも嗅神経幹細胞に関する研究なども行っており、これらのトピックについてはまた別の機会に紹介したいと思います。いずれのプロジェクトも分子生物学をベースとしながらも、出来る限り臨床医学への応用に繋がるような研究を目指しておりますので、学内の先生方の御意見やアイデアを頂いて共同研究の輪を広げたいと考えております。また、大学院生を募集しておりますので、興味を持たれた方は是非、研究室をお訪ね下さい。

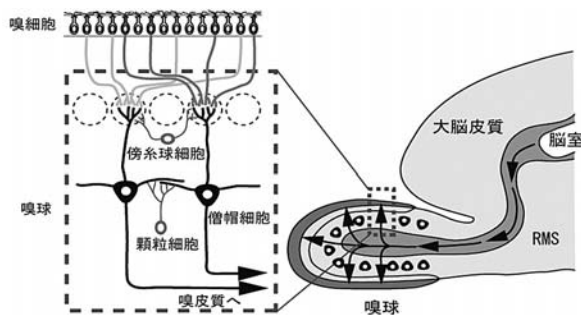


図1 マウス嗅覚神経回路の模式図

嗅球介在神経細胞（傍系嗅細胞・顆粒細胞）は脳室周辺で産生され、rostral migratory stream (RMS)と呼ばれる経路を通過して嗅球へと移動し新たな神経回路を形成する。

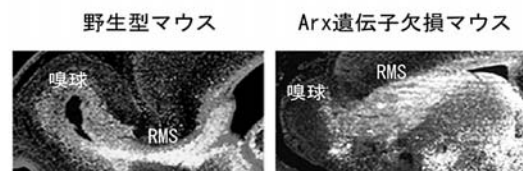


図2 野生型及びArx遺伝子欠損マウスの脳切片

Arx遺伝子欠損マウスでは嗅球介在神経細胞が嗅球へと進入できずにRMS内で停留しているのが見られる。

出生後早期新生児の体温変動と行動状態との関連

教授 上本野 唱子

出生後早期新生児(生後7時間まで)の体温変動に着目したのは、産婦人科医師によって書かれた1冊の本(久保田史郎著、THE OSAN:安産と予防医学、KMC出版部)との出会であった。久保田氏によると、当時の出生間際の新生児は“寒さで震えている”というのだ。それまで、早期新生児の体温についてなど考えてみる機会もなかった。ただ、本を手にした頃はカンガルーケア(母親の素肌の上に裸の赤ちゃんを密着させる)が脚光を浴びている時であった。出生直後からのカンガルーケア時の母子の体温変化を知るため、双方の腋窩温を開始から30分後まで測定する研究を行った。しかし、実験を主にしている研究者から、胸部の接触する面積等測定する必要はないのかという問いに解決策を見出すことができなかった。その後たどりついたのが上記のテーマであった。

もう一つの疑問は、生まれて間もない時期の新生児は比較的泣くことが多い。しかも、看護者にとって泣くことは元気の良い、泣くのも仕事ととらえられているふしもあった。出生後早期新生児の血液循環は胎児循環の名残である卵円孔と動脈管の閉鎖が十分ではなく、機能的に閉鎖している傾向にある。文献検討の結果、泣くことは右心圧を高めることにつながり、静脈血が卵円孔を通じて動脈血に流入し、酸素飽和濃度の低下をきたすことや血圧を上昇させることにつながることも分かった。そのため、この時期に早期新生児が泣くのは生理学的に好ましくない。しかし、好ましくない状況を呈してまでも泣くことの必要性は何なのだろうという疑問がこのテーマに取り掛かるきっかけであった。また、一般的には生後8時間頃までは経口摂取が中止されている。この時期に泣くということのアセスメントすることは看護する上からも意義のあることと考えられた。

生まれて約2時間後の新生児に深部体温計(皮膚に取り付けたセンサーから皮下の温度を推計し測定する体温計。原理は熱流補償法による。)を用い、核温(胸部深部温)と外殻温(足底深部温)を連続して7時間後まで測定し、同時にこの期間の行動状態[深い眠り、浅い眠り、まどろみ、覚醒、泣き(単発的)、泣き(連続的)]を観察し、睡眠期と活動期に分け体温との関連を検討した。その結果、足底深部温については時間の経過に沿って温度が上昇し、胸部深部温との差が小さくなるタイプ(収束群)と、足底深部温は上昇せず、胸部深部温との差は小さくならないタイプ(解離群)が認められた。胸部深部温については睡眠期に低下し活動期に上昇を認めた。収束群の児は行動状態が活発であった。足底深部温が上昇すると、相対的に胸部深部温が低下する。そのため、胸部深部温の低下を防ぐ為に、泣くことで胸部深部温を維持しながら、足底深部温を上昇させているのではないかと考えられた。啼泣時の発声、それに伴う吸気・呼気は筋肉の緊張と弛緩を繰り返す。そのことで摩擦エネルギーを熱に変化させる合目的な行動ではないかと推測された。泣く、眠るといった、成人では何の変哲も無い行動状態が、出生間もない新生児にとっては体温の変化をもたらす重要な行動状態であるという考えに至った。

成人では極めて普通に行われる能動的な行動性体温調節が、新生児では不可能である。早期新生児の行動一つ一つをアセスメントし児の生存環境を至適なものに整えることは生活の質につながる。そして、それは看護者の手にかかっている。根拠のある看護を提供する為にもこの研究テーマを発展させていき、看護実践のevidenceを構築したいと考えている。

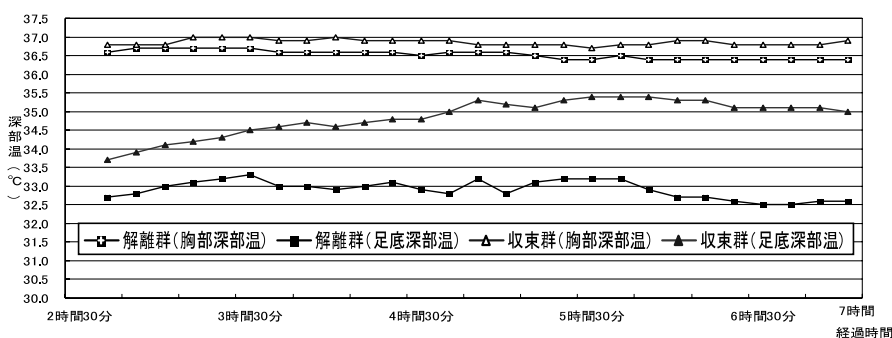


図1 収束群および解離群の典型例

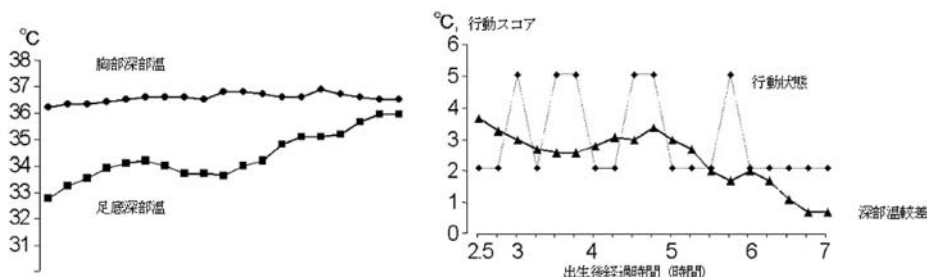


図2 15分毎にみた収束群の典型例
胸部深部温と足底深部温差(胸部深部温-足底深部温)が縮小した事例。この事例は行動スコア5(活動期)を4回認めた。



本年度は49名の新規採用者を迎え、以下の目的と目標のもとに4月2日から1週間研修を行いました。

目的：奈良県立医科大学附属病院の機能を理解し組織の一員であることを認識する。

奈良県立医科大学附属病院の看護職員としての意識と心構えを養う。

目標：看護部の一員であることを自覚し職業人として行動できる。

基礎看護教育と臨床のギャップに新卒者は不安を持っています。しかしそれ以上に患者様が不安を抱かないことが大切です。そこで3月末より基礎技術の復習研修に取り組みました。また基本的なコミュニケーションを大切にして、インフォームドコンセントを取り入れた看護実践に備えられるように接遇研修も行いました。‘心の癒しは笑顔のある言葉から’を合言葉にして。



採血の実習



点滴の実習

N I C Uにおける母乳育児支援の試み

看護学科母性看護・助産学 教授 脇田 満里子 講師 江南 宣子

昨年10月から、NICUに通う母親を対象に乳房ケアを通して身体と心へのサポートを目的とした母乳育児支援を始めました。毎水曜日の午後、NICUの個室が乳房ケア室と変化します。短いひとときですが明るく楽しい時間になるよう工夫しています。乳房ケアを受けた方は、現在延べ約150名程となりました。

母親たちは母子分離を余儀なくされ、産後間もなくから我が子の回復や成長への願いを込めて母乳を届け続けています。調査によると、母乳の分泌を継続していくための母親の不安は大きく、搾乳量の減少や母乳が出なくなったことを「とても辛かった」と答えています。また、直接授乳が可能になっても、哺乳びん慣れした児にうまく吸啜させることができないなどのショックは大きかったと述べています。このことから、周産期医療センター高橋教授、NICU有城師長、そしてスタッフの皆さんのご協力を頂き、乳房ケアを通して母親たちの身体と心を受け止める支援を実施しています。

その中で改めて感じることは、分泌状態がどうであれ、母親1人ひとりの頑張りを認めながら「いいおっぴいですよ」の一言を伝えてあげることが、とても大きな救いになることです。「おっぴいもこころも楽になった」「搾乳する気持ちが軽くなった」「ほっとした」「明るくなれた」などたくさんの言葉を頂いています。同時にNICUスタッフの母乳育児への関心も深まり、母親とのよりよい関係づくりに役立っています。

今後の課題は、NICUスタッフと連携して直接授乳を開始した母親への継続的な授乳援助のシステムの構築を目指し、更に退院後の支援へと繋がられるよう考えていきたいと思ひます。



NICUの母乳育児支援の風景

平成19年度 住居医学研究奨励金採択決定一覧

(研究推進室)

昨年度に開設され、本年度で2年目を迎える寄附講座(住居医学)に係る住居医学研究奨励金が採択されました。

グループ	種類	題目	研究代表者		
			所属	職	氏名
化学物質グループ	公募継続	胎児期及び乳幼児期の室内大気汚染物質が喘息発症に及ぼす影響についての検討	第二内科学	教授	木村 弘
	公募新規	シックハウス症候群関連化学物質の心筋イオン活動への影響	第二生理学	准教授	清水 壽一郎
	公募新規	室内環境汚染物質暴露による肺胞上皮細胞のアポトーシス解析	第一解剖学	教授	東野 義之
	公募新規	環境(住居、地域、国)差に起因する生体機能に対する加齢変化解析	薬理学	講師	佐藤 広康
カビ・ダニグループ	コア継続	住居内微生物環境による免疫機能制御法の開発	細菌学	教授	喜多 英二
	コア継続	ハウスダスト・シックハウスに関する研究	住居医学	教授	筏 義人
	公募継続	クモから学ぶ環境に優しい紫外線耐久性の住生活素材の研究	化学	教授	大崎 茂芳
	公募継続	アレルギー疾患モデル動物を用いたシックハウス症候群の免疫学的研究(AILE1遺伝子の解析を中心に)	皮膚科学	教授	浅田 秀夫
骨折・調査グループ	コア継続	高齢者のQOLと住環境に関するコホート研究-藤原京スタディー-	地域健康医学	教授	車谷 典男
	コア継続	住居内での転倒予防に関する研究	整形外科	教授	高倉 義典
	公募新規	高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価	老年看護学	教授	守本 とも子
在宅グループ	公募継続	聴・平衡覚と住居環境に関する研究	耳鼻咽喉科学	教授	細井 裕司
	公募継続	住居における環境放射線の研究	放射線腫瘍医学	教授	長谷川 正俊
	公募新規	在宅医療支援及び急変探知システムの開発	産科婦人科学	教授	小林 浩
	公募新規	高齢者の排尿管理: 排尿介助補助機器の開発	泌尿器科学	講師	平山 暁秀
快適グループ	公募継続	住居が脳機能、精神発達に及ぼす影響-海馬神経細胞新生の観点から	第二解剖学	教授	和中 明生
	公募継続	自然木材の香りが睡眠・覚醒・行動レベルに及ぼす効果	第一生理学	講師	豊田 ひみよ
	公募継続	住居環境での「におい」の感知に関する基礎研究	生命システム医科学	教授	坪井 昭夫
	公募継続	新生児・小児の入院患者・看護環境に適した病棟設計と病児の在宅療育・介護の住居環境設備に関する研究	周産期医療センター	教授	高橋 幸博

住居医学研究会開催のお知らせ

平成19年7月26日(木)に第9回住居医学研究会が厳櫃会館3階大ホールにて開催されます。

演者 九州大学大学院芸術工学研究院 副研究院長 綿貫 茂喜 氏

主題 生理値からみた住環境の快適性

平成19年度 ひらめき☆ときめきサイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI (研究成果の社会還元・普及事業) に採択されました。

○のぞいてみよう 画像による最先端医療

放射線医学教室 教授 吉川 公彦

- ・開催予定日: 平成19年8月5日(日) 本大学内
- ・対象者: 中学生・高校生(約20名)
- ・内容: 講演、質疑応答・フリートーク、見学・実習等
※修了式、「未来博士号」授与を予定

○いのちの連続性と環境変化 ～宇宙研究へ～

生物学教室 教授 大西 武雄

- ・開催予定日: 平成19年8月9日(木) 本大学内
- ・対象者: 中学生・高校生(約150名うち体験実習のみ約50名)
- ・内容: 講演、質疑応答・フリートーク、クイズ、体験実習等
※修了式、「未来博士号」授与を予定

平成19年度「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト」(SPP) 及び 「理数系教員指導力向上研修(ティーチャーズ・サイエンスキャンプ)」(TSC) に採択されました。

○「理数系教員指導力向上研修 (ティーチャーズ・サイエンスキャンプ)」(TSC)

生物学教室 教授 大西 武雄

- ・開催予定日: 平成19年8月3日(金) 本大学内
- ・対象者: 高校教諭(約30名)
- ・内容: 体験実習等

○「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト」 (SPP)

生物学教室 教授 大西 武雄

- ・開催予定日: 平成19年8月10日(金) 本大学内
- ・対象者: 高校生(約150名うち体験実習のみ約50名)
- ・内容: 講演、体験実習等
- SPP協力教室: 第一生理学教室(11月実施予定)
化学教室(12月、1月実施予定)

7月28日(土) オープンキャンパス実施

(学務課)

前年度に引き続き、今年度も夏休み中にオープンキャンパスを実施します。
実施内容は、下表のとおりです。なるべく多くの方が参加されるよう、お知り合いにお知らせください。
なお、主な対象は、高校生及び受験生ですが、対象者を限定しておりませんので、どなたでも参加することができます。
また、実施にあたり関係の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

時 間	実 施 内 容
12:30~13:00	受付・施設見学申込み
13:00~13:50	講演会『医療職を志す人へ』 学長 吉田 修
13:50~14:05	会場移動 ※医学科と看護学科で会場が別になります
14:05~14:15	学科紹介 医学科:大西武雄医学部長 看護学科:守本とも子看護教育部長
14:15~15:00	在学生から受験生へのメッセージ
15:00~15:10	休憩
15:10~15:40	模擬ミニ講義 医学科 神経内科学教授 上野 聡 看護学科 母性看護・助産学教授 脇田 満里子
15:40~17:00	施設見学 附属病院・総合研究棟・基礎医学校舎・看護学校舎等を見学
15:40~17:00	個別相談 教員による相談コーナー 在学生による相談コーナー

～ボランティア募集～

今年度も医学科・看護学科合同で実施しますので、多数の参加者が見込まれます。

ついては、在学生の方で当日の受付、施設見学及び個別相談を手伝っていただける方を募集しています。ボランティアの受付は、学務課厚生・入試係で行っています。



奈良県立医科大学整形外科野球部が悲願の全国制覇を成し遂げました!

(整形外科学教室)

過日、神戸で開催された第80回日本整形外科学会学術総会期間中に行われた親善野球大会に於いて、整形外科野球部(CORTEX)が近畿勢として初の全国優勝を果たしました。オリックスバファローズ本拠地のスカイマークスタジアムで5月27日早朝に行われた対琉球大学決勝戦は1点を争う好ゲームで、試合後の歓喜の渦の中で高倉教授が高く宙に舞いました。整形外科野球部は結成後4年目に初めて近畿予選を勝ち抜き、その後3年連続全国大会に出場した末の優勝でした。日頃の部員の自己鍛錬と犠牲の賜物ですが、支援していただいた医局、関連病院、同門会の先生方、関係者の方々に深謝いたします。



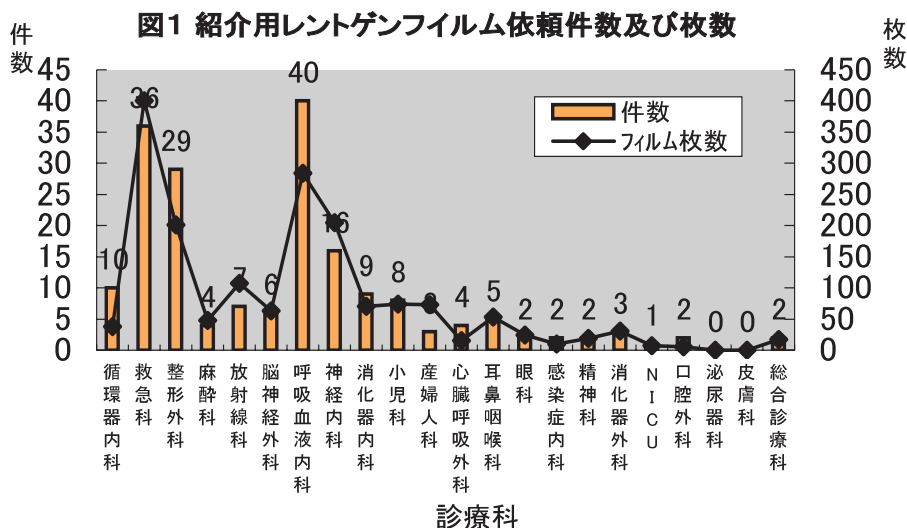
スカイマークスタジアムでの優勝記念撮影

地域医療連携室の紹介

地域医療連携室室長補佐（看護副部長） おおみょう みきこ 大名 美記子



当院の地域医療連携室は地域の病院・診療所等との連携の強化を図り、特定機能病院としての役割を明確化し、利用者に対する医療・福祉サービスの一層の向上を図るため、平成17年4月に設置され、主に後方支援（退院・転院）を中心に活動してきました。今年4月からは中央部門として組織編成され、私は地域医療連携室室長補佐兼看護副部長として就任致しました。現在の医療機関にとって地域医療連携室はキーワードと言われており、その責務が大きく課せられていることを強く感じています。現在は、1階の医療サービス課（医療相談）内で併設運用しており、主に ①後方支援 ②院外からの電話問い合わせ対応 ③院外紹介患者用レントゲンフィルム支援等を行っています。しかし、今年度の大きな目標は、前方連携（紹介患者様の受診予約・紹介元医療機関との連携・調整）を機能・充実させることとあります。院外からの電話対応においても診療予約に関する問い合わせの内容は多く、前方連携を機能させることで、待ち時間の短縮や後方支援のスムーズな運用に期待が持てると考えています。現在本格実施に向け、システムフローの検討や帳票等の様式作成、各診療科の受入れ体制（予約枠等）の検討を進めていますが、運用においては各科診療科医師の協力は大きな柱であり、各施設内の連携機能の充実とマインドの統一、そして職種を超えた相互理解が重要であり、皆様にご協力をお願いする次第です。



5/31現在の業務実績としましては、後方支援患者依頼件数は13件で支援完了件数は8件です。また、左のグラフに示しますように、紹介用レントゲンフィルムの依頼件数は191件あり、プリント枚数は1,863枚、患者1回の最高枚数は89枚でした。

地域医療は決して一つの医療機関で完結するものではなく、他の医療機関と連携して展開されるべきものであり、地域医療連携室はその窓口となって頑張っていく所存です。皆様の一層のご指導とご協力をお願いいたします。

平成19年度

科学研究費補助金の決定

(研究推進室)

研究種目	所属	職名	氏名	研究課題	研究期間
基盤研究A	生物学	教授	大西 武雄	シグナル伝達分子を標的とした放射線誘導アポトーシスの制御	17～19
基盤研究B	第二生理学	准教授	清水 壽一郎	心筋アクチンミオシン・クロスブリッジのナノ挙動から見た心筋障害の病態生理学的解析	17～19
基盤研究B	小児科学	教授	吉岡 章	第Ⅷ因子/VWF複合体の機能制御に基づく新しい抗血栓戦略	17～19
基盤研究B	第一内科学	教授	斎藤 能彦	心不全発症進展における新しい転写抑制因子NRSFとその標的遺伝子の意義の解明	18～19
基盤研究B	生物学	講師	高橋 昭久	温熱による耐性獲得機構の解明	18～19
基盤研究B	消化器・総合外科学	教授	中島 祥介	肝細胞移植および肝組織作製治療の実現化にむけた前臨床研究	18～20
基盤研究B	脳神経外科学	教授	榑 寿右	血管新生因子抑制による脳梗動脈静脈瘻の治療に関する研究	18～21
基盤研究B	耳鼻咽喉科学	教授	細井 裕司	実環境で最重度難聴者用超音波補聴システムを実現するための基礎的・臨床的研究	18～20
基盤研究B	口腔外科学	教授	桐田 忠昭	口腔がんにおける重粒子線療法のための基礎的研究	18～20
基盤研究B	第二内科学	教授	木村 弘	睡眠時無呼吸による低酸素ストレスは全身性炎症を惹起し動脈硬化を促進させる	19～21
基盤研究B	病理病態学	教授	小西 登	ヒト前立腺の組織幹細胞を用いた癌化の分子メカニズムに関する研究	19～21
基盤研究B	放射線腫瘍医学	教授	長谷川 正俊	放射線感受性の腫瘍内不均一性に関する分子生物学的解析	19～21
基盤研究C	麻酔科学	講師	井上 聡己	脳虚血に対する保護物質としてのデルタオピオイドの基礎的研究	16～19
基盤研究C	哲学(看護)	講師	池辺 寧	ハイデガー哲学における他者論の可能性と看護理論への応用についての研究	17～19
基盤研究C	第三内科学	学内講師	吉治 仁志	血管新生制御に基づく肝癌・肝線維化の個別化医療: 遺伝子診断による最適化の試み	17～19
基盤研究C	第三内科学	講師	植村 正人	ADAMTS13の解析と重症肝炎における微小循環障害の発生機序の解明	17～19
基盤研究C	小児科学	准教授	嶋 緑倫	凝固波解析による血液凝固機能評価に関する研究	17～19
基盤研究C	整形外科	講師	田中 康仁	再生医療技術に応用した殺細胞処理骨の再活性化に関する実験的研究	17～20
基盤研究C	麻酔科学	准教授	川口 昌彦	脊髄虚血モデルにおける灰白質及び白質障害の長期的評価	17～20
基盤研究C	第二解剖学	教授	和中 明生	グリア特異的小胞体ストレスセンサーOASISの機能解析	18～19
基盤研究C	第一生理学	講師	和田 佳郎	前庭動眼反射を積極的に利用した動体視力トレーニング法の確立	18～19
基盤研究C	薬理学	教授	吉栖 正典	メタボリックシンドロームにおける新規MAPキナーゼ、BMK1の生理的役割の解明	18～19
基盤研究C	分子病理学	博士研究員	藤井 澄	胃前癌病変としてのテロメア短縮病変の意義	18～19
基盤研究C	病理診断学	准教授	中峯 寛和	悪性リンパ腫病理組織切片上でのランブ法を用いた新しい核酸増幅法の確立	18～19
基盤研究C	細菌学	教授	喜多 英二	O157大腸菌感染ストレス誘導レプチンによるGb3結合志賀毒素活性化機序	18～19
基盤研究C	地域健康医学	教授	車谷 典男	旧石綿管製造工場周辺に集積した中皮腫症例の石棉曝露の検証と死亡リスク評価	18～19
基盤研究C	第二内科学	助教	友田 恒一	ヒト肺の力学強度マップ作製の試み-細葉中心型肺気腫の上肺野からの発症機序の解明	18～19
基盤研究C	小児科学	講師	田中 一郎	抗第Ⅷ因子インヒビター存在下における第Ⅷ因子活性発現に関する研究	18～19
基盤研究C	皮膚科学	准教授	浅田 秀夫	蚊アレルギー患者におけるEBウイルス感染NK細胞増殖症に対する分子標的療法の開発	18～19
基盤研究C	生物学	准教授	大西 健	RNA干渉法を用いた担がんヌードマウス腫瘍増殖抑制の研究	18～19
基盤研究C	放射線腫瘍医学	講師	岩田 和朗	TLシートによる治療用密封小線源の最適配列決定システムの開発	18～19
基盤研究C	中央内視鏡	准教授	藤井 久男	直腸吻合術後の排便反射の経日的変化とBDNF局所投与による壁内神経系の再生促進	18～19
基盤研究C	消化器・総合外科学	助教	向川 智英	骨髄幹細胞を用いた腸管構成細胞の再生と炎症性腸管粘膜障害に対する治療への応用	18～19
基盤研究C	消化器・総合外科学	准教授	高 濟峯	肝移植におけるVWF切断酵素の役割と新たな拒絶反応診断マーカーの開発	18～20
基盤研究C	整形外科	教授	高倉 義典	骨髄間葉系幹細胞を用いた靭帯・腱付着部の構造再生に関する研究	18～20
基盤研究C	産婦人科学	教授	小林 浩	植物葉緑体への遺伝子導入による分子標的抗転移薬の開発	18～19
基盤研究C	耳鼻咽喉科学	准教授	家根 且有	頭頸部癌の放射線化学療法における生存シグナル経路を分子標的とした増感効果の検討	18～19
基盤研究C	口腔外科学	助教	青木 久美子	DNA多形解析による口腔扁平上皮癌疾患感受性遺伝子の検索	18～19
基盤研究C	第一内科学	准教授	金内 雅夫	メタボリックシンドロームと地球温暖化の連関を基軸とした省CO2モデル保健事業	19～21
基盤研究C	第一生理学	講師	豊田 ふみよ	フェロモン候補としてのイモリ腹腺ステロイドに関する研究	19～20
基盤研究C	病理病態学	准教授	中村 光利	脳神経膠腫の病理診断および治療法選択のための遺伝子解析に関する研究	19～20
基盤研究C	病理病態学	助教	石田 英和	前立腺癌組織の三次元解析による腫瘍分布の検索と腫瘍発生・進展に関する研究	19～20
基盤研究C	分子病理学	講師	傳田 阿由美	肝幹細胞/前駆細胞の動態から肝発癌機構を捉える	19～20
基盤研究C	第三内科学	教授	福井 博	マクロファージと肝障害: Toll-like受容体制御による新規治療の探索	19～21
基盤研究C	第一内科学	講師	上村 史朗	慢性腎不全で加速される重症心血管疾患発症の分子機序の解明と新しい治療法の開発	19～20
基盤研究C	第二内科学	准教授	濱田 薫	妊娠中の大気汚染曝露は次世代の気管支喘息発症を増加させる。	19～20
基盤研究C	第一内科学	講師	岩野 正之	腎疾患進展におけるFSP1陽性ポドサイトの意義	19～20
基盤研究C	神経内科学	准教授	平野 牧人	神経変性疾患原因蛋白の核内輸送と発症機序解明	19～20
基盤研究C	小児科学	講師	杉本 充彦	血流状況下におけるVWF-ADAMTS13の機能連関の解析	19～20
基盤研究C	輸血部	学内講師	松本 雅則	造血幹細胞移植後TMA/VODの成因解析	19～21
基盤研究C	小児科学	助教	野上 恵嗣	凝固第Ⅷ因子活性化/不活性化機構の解明と凝固/抗凝固療法の実現に関する研究	19～20
基盤研究C	精神医学	講師	森川 将行	アミロイドベータに対する中枢神経細胞の防御機能に関する研究: 遺伝子修復の観点から	19～20
基盤研究C	精神医学	学内講師	井上 眞	統合失調症の前頭葉機能と拡散強調画像との相関の研究	19～20

研究種目	所属	職名	氏名	研究課題	研究期間
基盤研究C	放射線医学	教授	吉川 公彦	腹部大動脈瘤に対するステントグラフト治療: 瘤径推移に関する因子の検討	19~20
基盤研究C	消化器・総合外科学	学内講師	庄 雅之	T細胞不活化制御による新規癌治療法の臨床導入を目的とした発展的研究	19~20
基盤研究C	消化器・総合外科学	医員	山田 高嗣	脂肪由来幹細胞の肝細胞特異的分化誘導における微小重力環境の影響	19~20
基盤研究C	消化器・総合外科学	学内講師	小山 文一	潰瘍性大腸炎に対する新しい遺伝子デリバリーシステムを用いたBcl-XL遺伝子治療	19~20
基盤研究C	胸部・心臓血管外科学	教授	谷口 繁樹	新しい心不全治療: 三次元人工心筋組織の臨床応用を目指して	19~20
基盤研究C	胸部・心臓血管外科学	学内講師	辻 毅嗣	重症不全心に対するRNAと超音波を組み合わせた新しい遺伝子導入治療法の開発	19~21
基盤研究C	寄生虫学	准教授	吉川 正英	ES細胞および骨髄間質幹細胞の脳内共同移植療法の開発ー脳出血モデルでの検討ー	19~20
基盤研究C	整形外科	准教授	矢島 弘嗣	再生医療技術を用いた血管柄付き移植骨増大の試み	19~21
基盤研究C	泌尿器科学	講師	石橋 道男	ガンマラクトン化合物を用いた腎障害後の進行を抑制する腎修復再生機構の解明	19~20
基盤研究C	産婦人科学	助教	坂田 麻理子	妊娠・授乳期の薬物動態に関する統合データベース作成及び情報提供システムの構築	19~20
基盤研究C	産婦人科学	医員	春田 祥治	子宮内膜細胞より産生されるピクニンの抗炎症作用の解明	19~20
基盤研究C	第一生理学	助教	杉岡 美保	ATP受容体サブタイプの機能的連関による網膜神経上皮細胞の増殖制御機構	19~20
基盤研究C	消化器・総合外科学	准教授	金廣 裕道	小腸移植におけるグラフト腸管の障害・再生機構の解明とその制御	19~20
基盤研究C	救急医学	准教授	西尾 健治	フォンヴィレブランド因子切断酵素による血栓形成制御に関する研究	19~20
基盤研究C	口腔外科学	講師	川上 哲司	静水圧ストレスによる顎関節滑膜細胞の応答	19~20
基盤研究C	口腔外科学	学内講師	川上 正良	顔面の初期発生を制御する分子機構	19~20
基盤研究C	基礎看護学	講師	青山 美智代	看護技術の修得レベルを適切に評価する取り組み	19~22
基盤研究C	健康政策医学	助教	御興 久美子	アカデミック・ハラスメント環境評価基準の策定とそれを用いた点検評価方法の確立	19~21
基盤研究C	地域看護学	講師	尾ノ井 美由紀	知的障害者・児の肥満予防および改善プログラムの開発に関する研究	19~21
基盤研究C	教学	教授	藤本 圭男	射影代数多様体上の自己準同型写像の研究	18~19
基盤研究C	精神医学	准教授	定松 美幸	モデル動物を用いた自閉症治療法についての検討	19~21
萌芽研究	第二生理学	准教授	清水 壽一郎	心筋特異的非ウイルス性遺伝子ベクターの開発および心筋細胞との相互作用評価	18~19
萌芽研究	生物学	講師	高橋 昭久	放射線誘導DSB認識タンパク質の挙動解明	18~19
萌芽研究	消化器・総合外科学	教授	中島 祥介	膵癌における癌幹細胞の同定と機能解析の試み	18~19
萌芽研究	化学	教授	大崎 茂芳	クモから学ぶ糸のリサイクルシステム	19~20
萌芽研究	産婦人科学	助教	金山 清二	網羅的シグナローム解析に基づくE-cellを用いた癌転移シミュレーションの構築	19~20
萌芽研究	寄生虫学	教授	石坂 重昭	初期化因子の解明ーテラーメイド再生医療への応用に向けて	19~20
萌芽研究	母性看護・助産学	講師	浅見 恵梨子	院内助産所創設のシステム構築と、課題に関する研究	19~22
若手研究B	病理病態学	講師	島田 啓司	前立腺癌細胞における新規遺伝子PCA-1の機能解析	18~19
若手研究B	第一内科学	助教	中谷 公彦	糖尿病例での血管石灰化病変におけるKlotho蛋白とFGF23蛋白の意義	18~19
若手研究B	寄生虫学	助教	王寺 幸輝	Wnt proteinによる毛包再生とそのメカニズムの解明	18~19
若手研究B	放射線腫瘍医学	講師	玉本 哲郎	癌移植腫瘍における温熱およびX線処理後に誘導される遺伝子・タンパク質群の解析	18~19
若手研究B	(寄付)住居医学講座	准教授	服部 耕治	超音波を用いたヒト関節軟骨定量評価法	18~19
若手研究B	泌尿器科学	博士研究員	鳥本 一匡	夜間頻尿の治療法開発を目指したテレメリー法によるラット膀胱求心性神経活動の検討	18~19
若手研究B	分子病理学	助教	笹平 智則	口腔癌の診断・治療におけるヘッジホッグ変異の有用性に関する研究	18~19
若手研究B	精神医学	助教	井上 雄一朗	ドーパミン神経を介した後シナプス細胞へのニコチン、エタノールの作用	19~20
若手研究B	先端研・RI	研究員	岩本 顕聡	中心体異常を指標にした癌診断法の開発	19~20
若手研究B	細菌学	助教	王寺 典子(正橋典子)	トロホプラスト上のHLA-Eによる胎盤NK細胞の集積・分化機構の解明	19~20
若手研究B	第一内科学	助教	川田 啓之	亜急性血栓性閉塞および慢性期再狭窄予防を目的とした次世代型冠動脈ステントの開発	19~20
若手研究B	麻酔科学	助教	瓦口 至孝	新生児中枢神経に対するオピオイドの脳保護効果の検討	19~21
若手研究B	胸部・心臓血管外科学	助教	木村 通孝	層構造を持つ人工気管の作成: 上皮・筋肉・軟骨、三層構造による強度、抗感染性の獲得	19~20
若手研究B	耳鼻咽喉科学	助教	阪口 剛史	微小振動音源を用いた発声装置の声質改善のための基礎的検討	19~21
若手研究B	神経内科学	講師	杉江 和馬	自己貪食空胞性ミオパチーの疾患概念確立とオートファジー機構の解明に関する研究	19~20
若手研究B	第一内科学	助教	竹田 征治	PIGFによる心保護効果を応用した急性心筋梗塞に対する新規治療法の開発	19~20
若手研究B	放射線医学	助教	田中 利洋	肝癌に対する動注療法における薬物動態と血流改変術に関する研究	19~20
若手研究B	脳神経外科学	助教	田村 健太郎	ベナンブラ領域におけるグルタミン酸再吸収に関わるギャップジャンクションの働き	19~20
若手研究B	胸部・心臓血管外科学	研究員	田村 大和	放射線X線解析法による心筋クロスブリッジ動態解析ー不全心のナノ診断から治療評価へ	19~20
若手研究B	胸部・心臓血管外科学	助教	内藤 洋	人工心筋組織移植による心筋梗塞治療: 移植に最適な人工心筋組織の新たな開発	19~20
若手研究B	第二生理学	教務職員	三澤 裕美	心肥大のエネルギー消費機構とカルシウム動態の経日的解析	19~20
若手研究B	精神医学	助教	芳野 浩樹	統合失調症母体ウイルス感染モデルマウスのシナプス伝達に対するドーパミンの効果	19~20
若手研究B	生命システム医科学	助教	吉原 誠一	転写調節因子Arx及びFezによる一次嗅覚神経回路形成機構の解析	19~20
若手研究(スタートアップ)	脳神経外科学	助教	西村 文彦	脳腫瘍に対する養子免疫療法の基礎的研究	19
若手研究(スタートアップ)	口腔外科学	助教	井上 公秀	顎顔面の形態発生に関与するL3/Lhx8遺伝子の機能解析	19

チェンマイ大学看護学部との学術交流はじまる!

(看護学科)

チェンマイ大学医学部はすでに奈良県立医科大学医学部と学術交流協定を結び、毎年学生や教員が交流していることは周知の事実であるが、チェンマイ大学看護学部と本学看護学科との関係はまったく成立していなかった。チェンマイ大学と看護学科の交流と国際看護論への発展は、思いがけない出会いから始まった。平成18年3月に医学科が結んでいる国際交流協定によるチェンマイ大学訪問に参加する看護学科の学生2名に守本教授が同行したときには、まだ、本学看護学科とチェンマイ大学看護学部との交流はまったく形を成してはいなかったが、守本教授のたつての願いでチェンマイ大学看護学部の部長との面会が実現し、今後の交流への話し合いが始まった。守本教授は、山口大学国際看護学教授のスーザン・チュラーリ氏ともチェンマイ大学で出会い、この出会いが、その後の国際看護論構築へ大きく貢献することとなった。



チェンマイ大学へ訪問

チェンマイ大学看護学部は歴史も古く、タイでは有数の看護学部である。博士課程、外国人学生向けのインターナショナルコース（すべての授業を英語で行う）の大学院も擁する大規模な学部であり、WHOのセンターも兼ねているという点では、本学看護学科が学ぶ点も多いことは明らかであった。HIV/AIDS予防活動など、日本では見ることのできない活動も多く、補完医療への取り組み等もされている。多彩かつ盛んな活動を繰り広げているチェンマイ大学看護学部は、多くの博士号を取得した看護教員が活躍している学部であり、そうしたアジアの看護大学と本学が交流することは、これからの看護師の活動の場を広げる意味からも、重要な意味を持つと考えられた。

幸い、チェンマイ大学看護学部は、本学医学部看護学科との交流に強い関心を示し、帰国してから、本格的な交流への話し合いがメールによって始まった。同時に、国際看護論（19年度開講）の海外研修の候補地として、講義にあわせた海外研修が可能であるというチェンマイ大学看護学部からの回答を得ることができた。国際看護論は、本学の守本教授、勝井講師とともに、国際医療救援のスペシャリストである神戸大学医学部教授中園直樹氏、タイの文化人類学を専門とする京都文教大学教授馬場雄司氏、国際看護学を専門とし、アジア太平洋地域の看護にくわしい山口大学医学部保健学科教授スーザン・チュラーリ氏、国際人道支援の活動に携わっている文化人類学研究者コーネル大学博士課程在学中の渡辺知花氏など、学外からの多くの才能あふれる人々との出会いと協力を得て、学際的な異文化理解を見据えた新しい国際看護論の構築へ向けて着々と準備をすすめる一方で、チェンマイ大学との交流協定は次第に現実的な形を成してきた。学長はもとより、国際交流委員会の理解と賛成を得て、チェンマイ大学看護学部と本学医学部看護学科との学術交流協定は平成18年秋には草案作成までこぎつけることができた。

平成18年11月末に守本教授と勝井講師がチェンマイ大学を訪問し、広大なキャンパス内にあるゲストハウスに宿泊し、学術交流協定調印式に臨んだ。また、広大な看護学部内を見学し、翌年の国際看護論海外研修のプランについても、具体的な話し合いを持つことができた。看護大学としては後発である本学医学部看護学科ではあるが、個性と魅力あるプログラムを展開し、広く世界に活躍できる看護師を育成していく上でも、今回のチェンマイ大学看護学部との学術交流協定の意味は大きいものと言える。



チェンマイ大学との学術交流調印式

今年の8月に実施される第1回国際看護論の海外研修では、講義を担当している守本教授、勝井講師に加えて、神戸大学教授中園氏、神戸大学客員教授グレン氏、山口大学教授チュラーリ氏も研修に参加していただけるという嬉しいニュースもあり、今後もチェンマイ大学看護学部と本学との交流が、他の大学をも巻き込んで、さらに大きい交流の輪が広がることを確信している。

Report

法人における重要事項を審議するため、新たに「役員会」が設置され、原則として週1回開催されています。

また、法人の経営に関する重要事項を審議するため、「経営審議会」が、大学の教育研究に関する重要事項を審議するため「教育研究審議会（原則として月1回）」が開催されています。

承認された規程、委員会名簿等については今後本学、学内ホームページにて、順次公開していく予定です。

学内ホームページURL（閲覧は学内のみ可能）

<http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/soumuka/>

※公開ホームページに掲載

<http://www.naramed-u.ac.jp/aff/johokoukai/>

（総務課）

役員会及び教育研究審議会の報告

役員会（4月2日）

- 1 役員会規程を承認
- 2 学則を承認
- 3 大学院学則を承認
- 4 県が策定する中期目標（案）に対する意見はないことを承認
- 5 中期計画（案）を承認
- 6 業務方法書を承認 ※
- 7 料金の上限について承認 ※
- 8 科研費における間接経費の配分について承認
- 9 次の規程を承認
 - ・会計規程
 - ・役員報酬規程及び退職手当規程 ※
 - ・職員給与規程及び退職手当規程 ※
 - ・監事監査規程
- 10 平成19年度予算を承認

教育研究審議会（4月2日）

- 1 学則を承認
- 2 大学院学則を承認

教育研究審議会（4月5日）

- 1 看護学科学務委員会委員・同専門部会委員の選任について

役員会（4月11日）

- 1 助教2名の採用を承認（5月1日付け発令済）
- 2 次の規程を承認
 - (1) 教育研究審議会規程
 - (2) 教授会規程
 - (3) 学科教授会規程
 - (4) 医学科教授選考規程
 - (5) 看護学科教授選考規程
 - (6) 看護学科学務委員会規程
 - (7) 教員の任期に関する規程
 - (8) 兼業規程
 - (9) 臨床系教員の兼業に関する申合せ
 - (10) 特別研究員に関する規程
 - (11) 寄附講座規程
 - (12) 大学院医学研究科委員会規程
 - (13) 学位審査要領
 - (14) 学位審査に関する内規
 - (15) 学位審査に関する申合せ
 - (16) 大学院医学研究科出願資格に関する申合せ
 - (17) 専修生規程
 - (18) 大学院特別研究学生規程
 - (19) 外国人留学生の受入れに関する申合せ
 - (20) 本学以外の研究歴の加算について
 - (21) 学位論文審査の申合せ
 - (22) 本学の医療技術職員等として勤務する職員の専修生入学許可に関する申合せ
 - (23) 附属図書館管理規程
 - (24) 図書委員会細則
 - (25) 図書館閲覧規程
 - (26) 法人化に伴い、文言を整理すべき規程
- 3 大学院修士課程設置に向けて準備を進めることを承認
- 4 看護学科アドミッションポリシーを承認
- 5 次の就業規則及び同関連規程を承認
 - (1) 職員就業規則
 - (2) 医員及び臨床研修医に関する就業規則
 - (3) 日々雇用職員に関する就業規則
 - (4) 職員の職務に専念する義務の特例に関する規程
 - (5) 職員の勤務時間、休日、休暇等に関する規程
 - (6) 職員育児休業等規程
 - (7) 職員介護休業規程
- 6 附属病院副院長を4人以内の体制とすることについて承認

役員会（4月18日）

- 1 認証評価で指摘を受けた事項への対応について承認
- 2 次の就業規則及び同関連規程を承認
 - (1) 嘱託職員就業規則
 - (2) 職員採用等規程
 - (3) 職員の休職に関する規程
 - (4) ハラスメントの防止等に関する規程・運用等

- (5) 職員懲戒規程
- (6) 賞罰審査委員会規程
- (7) 安全衛生管理規程
- (8) 職務発明等規程等
- 3 看護師採用計画を承認
- 4 嘱託職員等の超勤単価について承認
- 5 看護学科准教授及び講師昇任候補者の選考について医学部長及び看護学科教授により構成する審査グループで審査を行うことを承認

役員会（4月25日）

- 1 教員選考基準を承認
- 2 健康審査会規程を承認
- 3 臨床教授等選考規程を承認
- 4 職員旅費規程を承認
- 5 附属病院における実習生の受入れに伴う取扱要領を承認
- 6 副院長発令等について承認（5月1日付け発令済）

役員会（5月2日）

- 1 看護師1名の採用を承認
- 2 教育開発センター兼任教員を承認

教育研究審議会（5月2日）

- 1 図書委員会委員を承認
- 2 兼業審査委員会委員を承認
- 3 ラジオアイソトープ委員会委員を承認

役員会（5月8日）

- 1 皮膚科学教授に本学准教授浅田秀夫氏を決定（5月16日付け発令済）

役員会（5月9日）

- 1 学則の一部改正を承認
- 2 助教1名の採用を承認（6月1日付け発令済）

役員会（5月16日）

- 1 講座研究費・学会旅費の配分について承認
- 2 附属病院規程の一部改正を承認
- 3 産休・育休教員の代替要員を導入することを承認

役員会（5月23日）

- 1 職員公舎管理規程を承認
- 2 教員の任期に関する規程の一部改正を承認
- 3 職員給与規程の一部改正を承認 ※

役員会（5月30日）

- 1 看護師3名の採用を承認

役員会（6月6日）

- 1 契約規程を承認
- 2 同志社女子大学との包括協定の締結について承認
- 3 准教授への昇任3名、講師への昇任1名及び助教採用10名を承認（6月16日付け、7月1日付けで発令済）

教育研究審議会（6月7日）

- 1 組換えDNA実験安全委員会委員を承認
- 2 図書委員会委員を承認

役員会（6月13日）

- 1 大学院修士課程の基本的な枠組を承認
- 2 耳鼻咽喉科学講座の名称を「耳鼻咽喉・頭頸部外科学」に変更することを承認（平成20年4月1日付け）
- 3 敷地内全面禁煙に向けた取組を進めるためのワーキンググループを設置することを承認

役員会（6月20日）

- 1 授業評価要項を承認（平成19年度については学生による授業評価を行うことを承認）
- 2 指名競争入札参加業者選定要領を承認
- 3 契約特別審査委員会規程を承認
- 4 廠舎会館電気保安規程の一部改正について承認
- 5（仮称）がん診療連携拠点病院運営検討委員会規程を承認
- 6 学会補助金交付要綱を承認

役員会（6月27日）

- 1 看護師3名の採用を承認
- 2 学会補助金の配分について承認
- 3 嘱託職員採用基準を承認

国家試験結果

(学務課)

さる3月29日、厚生労働省により第101回医師国家試験(2月17~19日実施)の合格者が発表されました。今回の試験結果は下表のとおりです。

第101回医師国家試験

本学医学部医学科				平均合格率			
区分	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)	全国	国立	公立	私立
新卒	95	89	93.7	92.3	94.0	94.8	89.8
既卒	11	3	27.3	48.4	53.1	39.6	44.1
計	106	92	86.8	87.9	90.2	91.1	85.0

看護師(2月25日実施)、助産師(2月22日実施)国家試験の合格者が3月27日に発表されました。試験結果は下表のとおりです。

第96回看護師国家試験・第90回助産師国家試験

本学短期大学部				平均合格率			
区分	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)	全国	大学	短大	専門学校
看護師(新卒)*	—	—	—	94.8	97.4	93.5	95.8
(既卒)	6	6	100	56.2	76.0	68.5	66.2
計	6	6	100	90.6	96.3	89.9	93.3
助産師(新卒)	15	14	93.3	95.0	96.3	94.9	94.0
(既卒)	1	1	100	61.8	73.3	55.6	50.0
計	16	15	93.8	94.3	95.8	93.8	93.3

*平成18年度は看護学科の卒業生がいなかったため、看護師新卒の受験者数がゼロとなっています。

第14回 中島佐一学術研究奨励賞授賞式及び受賞講演会を開催!

(研究推進室)

去る6月12日、臨床第一講義室において、中島佐一学術研究奨励賞の授賞式を執り行いました。

受賞者は、神経内科学講座の平野牧人准教授、消化器・総合外科学講座の高津峯准教授及び耳鼻咽喉科学講座の山中敏彰講師の3名で、それぞれの受賞者に対し、賞状、研究奨励金及び記念の盾が授与されました。

引き続き行われた受賞講演会では、受賞テーマに沿って、平野准教授からは「神経疾患原因蛋白のストレス下における核内輸送の検討」について、高津教授からは「生体部分肝移植における新たな拒絶反応診断マーカーの開発」について、山中講師からは「前庭系における脳への感覚代行入力と統合のメカニズム」について、それぞれ講演いただきました。

この賞は、故中島佐一名誉教授のご遺族から受けた寄付を基金として、平成5年度に設けられたもので、奈良県立医科大学において医学の学術研究に優れた業績をあげた若手教員に対し授与され、さらなる研究の発展を奨励することを目的としています。

例年、各所属に応募要項をお知らせしていますので、若手教員の方々の一層のご応募をお待ちしています。



写真説明

※後列：左より推薦者の上野教授、中島教授、細井教授
前列：平野准教授、吉田学長、高津教授、山中講師

下ツ道

(編集後記)

何かを創出するための具体的な方策は組み合わせにあります。本号では様々な角度からの組み合わせ、言い換えれば、出会い、連携、共同の例が紹介されています。出会う素材を提供するには各自の専門性を高める必要があります。このことも本号から読み取っていただければ幸いです。

掲載希望の記事等については、各編集委員までお知らせください。

- 山下 勝幸(生理学第一)
- 大西 健(生物学)
- 王寺 幸輝(寄生虫学)
- 金内 雅夫(内科学第一)
- 池邊 寧(看護学哲学)
- 澤 清美(看護学部)
- 岡本 眞昭(病院管理課)
- 芳倉 亮(学務課)
- 鷹野 覚(総務課)
- 福留 隆二(研究推進室)
- (○印は委員長)